

生きること

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるのか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるのか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(マタイによる福音書 5章 43-48節)

実は先日、私にとって非常にショックな出来事がありました。大学時代、私は海外支援を行う学生団体に所属し、仲間たちと熱い日々を過ごしていました。しかし数カ月前、当時の同級生や、私が大好きだった先輩たちが、私抜きで毎年キャンプに行っていることが発覚したのです。「なぜだ!」という激しい怒りと、引き裂かれるような悲しみが一気に押し寄せました。長く時間を共有し、共に戦ったはずの友人たちに、裏切られたような気持ちになったのです。

しかし、一晩が経ち、痛む心を抱えながらゆっくりと時間をかけて考え直したとき、私はある残酷な現実と直面せざるを得ませんでした。原因は、大学時代の「私の振る舞い」そのものにあったのです。

当時の私はこう思っていました。「大学とは知が集合する場所だ。だから、相手の意見の矛盾を知識で論破すること、それこそが知的な強者の証しだ」と。

私はミーティングのたびに、議論という名の口論を積み重ねました。相手を言葉で追いつめ、怒らせ、論破することによってどこか魅了されていたのです。私は「正しい仕事」をしていたつもりでした。しかし、私が正論で相手を叩きのめすたびに、彼らの心は離れていきました。彼らは私を「仕事仲間」としては認めても、決して血の通う「友人」にはしてくれなかったのです。

あのスティーブ・ジョブズは、莫大な富と名声、すべてを手に入れた人物でした。しかし、公式伝記作家ウォルター・アイザックソンが記録した晩年のジョブズの言葉はこうです。「私は子どもたちに、自分のことを知ってほしかった。」と言ったそうです。何よりも他者から理解されること、愛されることを望んだようでもあります。

私は、生きることと、その生き方を、大きく間違えていた。自分が正しいと証明するために他者を傷つけていた。そう気づいたとき、私は自分の未熟さに、激しい痛みを覚えました。

さて、私たちが今いるこの同志社に、かつて湯浅八郎という総長がいました。今から約 90 年前、軍部は同志社に対し、「キリスト教教育を捨て、天皇崇拜一色に染まれ」と強烈な圧力をかけている時代でした。そのような中で、湯浅総長は、軍の配属将校や役人たちと、何度も、何度も、粘り強く交渉を続けました。

しかし 1937 年、奮闘も虚しく、湯浅は総長の職を追われ、アメリカへ渡ります。その直後に太平

洋戦争が勃発しました。湯浅を待っていたのは、想像を絶する孤独でした。アメリカからは「敵国人」として監視され、祖国日本からは、敵国に留まる「国賊・非国民」として激しく非難されたのです。世界中で、彼を迎え入れてくれる場所はどこにもありませんでした。まさに、世界から裏切られたような境遇です。

戦後、1946 年。湯浅は新しい時代の同志社を再建するために、なくてはならないリーダーとして呼び戻され同志社の総長へと復帰します。日本に戻った彼を待っていたのは、かつて軍部と同調し、彼を追いついた人々でした。

もし皆さんが湯浅の立場なら、どうしたでしょうか。「なぜあの時、裏切ったのか」と激しく糾弾したり、心の深いところでそう思うのではないのでしょうか。

しかし、湯浅は彼らを裁きませんでした。戦時中、アメリカで感じたあの孤独の中で湯浅は神と聖書と対話を続けていました。主イエス・キリストはなぜ十字架につかねばならなかったのか。それは、罪深い私たちを救うためにご自分の命を投げ捨てて下さったのです。その主の十字架と愛を想い起こす時、湯浅は、「私もそして彼らもまた、時代の狂気に抗えなかった“弱い人間”なのだ」と理解することができたというのです。そして、湯浅の心に生まれたのは、怒りではなく「赦し」でした。この魂の格闘の果てに、湯浅はこれらの言葉を神から与えられ、それを書き残しました。

「生きることは愛すること。愛することは理解すること。理解することは赦すこと。赦すことは赦されること。赦されることは救われること。」

誰かを「絶対に許さない、自分が正しい」と憎み、裁いているとき、人間の心は「正義という名の傲慢な牢獄」に囚われています。湯浅総長は、他者を愛し、理解し、赦したとき、本当に救われたのは湯浅自身だったというのです。相手を裁く手を離れた瞬間、湯浅自身もまた「憎しみ」という牢獄から解放され、神様に「愛され」「赦され」「救われた」のです。

本日は、同志社スピリット・ウィークです。同志社人とはなんであるか。他の大学の学生と決定的な違いを一つ述べよ。というならば、それは「母校愛」だとか「優秀」だとか「団結力」だとか、そのような話でないと思うのです。私は聖書のことばと湯浅の言葉から「自分が最も苦しい時に、最も困難な時に、それでもなお他者を愛そうとする心、他者を理解しようとする心を持っているかどうか」だと思っています。

主イエスはおっしゃいました。「敵を愛し、あなたを迫害する人のために祈りなさい」「自分を愛してくれるひとを愛して何になるのか」と。自分の好きな人、意見の合う人を理解しようと思うのは簡単です。しかし、価値観が異なり、自分を否定してくる相手を理解しようとする心は、時に自分の魂が削られるような苦痛を伴います。だからこそ、その苦しさの中で、高い位置に立ち、そこから見下ろし、心を閉ざし相手を「論破」し屈服させようとするのではなく、「understand=理解する」相手の位置にまで降りてとどまり「理解しよう」ともがくこと。それこそが、湯浅総長が命がけて守り抜いた同志社のスピリットであり、良心であり、キリストの言う「愛」なのだと思うのです。

皆さんが、これから出会う理不尽な世界の中で、どうか「論破する強さ」ではなく、理解しようとする

る「愛の強さ」を選び取ってください。皆さんのその一歩の中に、同志社の精神は生き続けます。

「生きることは愛すること。愛することは理解すること。理解することは赦すこと。赦すことは赦されること。赦されることは救われること。」

この言葉を胸に抱きながら、私たちが同志社人らしく同志社人として歩めるよう、お祈りをいたします。